

## 表現の背後に在るもの

金城 満

夢遊病者のようなフワフワとした感覚。目を閉じてしかみえないもの、鼓膜が震えると聞こえなくなるもの、息を止めないと噴けないもの。煮え切らないというのじゃなく生で十分食べられる。アンカーがスーッと重力の方向に降りていき、ピンッと糸が張る。

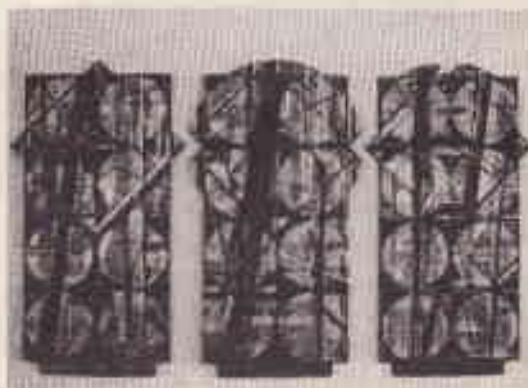
幼児期の頃こんな事があった。瓦屋根に上がり仰向けに星を見ていた。どれくらいだったかはわからないが、見たい星を見ようとすればするほど見えなくなり、その隙に目をズラすとそれが見えるのである。そんな事を繰り返していると、急に自分の身体が浮き上がり夜空へ落ちていく。次の瞬間、私の小さい手はギュッと瓦を握り締めた。背中に星間の熱を含んだ瓦を再び感じ、同時に距離感のない憂鬱と恐怖が凝込まれた。

「またまたユタムニーして……」と思われるだろうが、闇の中へ落ちていく、止め所なく落ちていく重力と反重力、そのバランス地点に自分がある。大事なのは皮膚一枚の境目、皮膚の裏側の触角である。細胞の一つ一つがうごめく自己を感じることである。

それらの感覚は訓練しなければ獲得できないだろうし、単に素質・才能だけに重きをおくのも素観的ではないだろうか。

では、それらの訓練の場所として学校現場の美術教育はどうかというと、例えば某新聞社主催による四面コンクールにあわせて年間計画を立てている傾向にあり、コンクールの「傾向と対策」に力を入れている。過去3度程、審査に関わったが、ある学年7000点余りをたった3人で審査したことがある。その年は極端な例ではあったが審査後は眼球が痛み作品をみるというより数をこなすのがやっとで、オマケに上位の選出は審査員同志の

力関係が顔をだし年配の方の意見で押し切られてしまった。その様な現状では美術教育に歪みが出無いはずはなく、大袈裟な言い方をすれば「表現」「芸術」という土壌が覆せていき、ふくよかな精神が育ちにくく「画一化」を助長しているように思う。これはもちろん私も含めた批判であり、大切なのはもっと表現の背後にある「何か」に目を向けるべきだろう。コンクールそのものの是非は複雑な



絹 絹

問題もあり紙面の関係上この程度に止めるが(開口 健「裸の王様」参照)、本質的な問題は山積みで、皮膚一枚で大人も子供も騒いでいる。だから、学校をでた後「ゲイジツなんてわかんない……」となる。その結果人間の本質が覆せていき、皮膚だけが肥大化し隙間ができる。「空洞化」である。それよりも、まずはジーッと眺めて「ニタリ」とする。微妙なところを感じられる。その世界へ入っていき、そんな寛容さを持ちたいものである。

少し角度は違うが「空洞化」を栄養剤リゲインのCMに見る。Japanese Businessmanが故障した車を炎天下でスパークさせ、脳裏に日本の彼女が浴衣に線香

花火というのがあるが、この同じ火花でもまばゆいばかりの炎天下と、すべてを包み込む闇とのコントラストが現代のジレンマであり「空洞化」を30秒に凝縮させたものと言えるだろう。(よって逆説CM、悲哀をもった皮肉とも言える)

さて、人それぞれ「アンカー」を降ろす場所も違えば、深さも違うだろう。また、降ろさない人もいるだろう。私の場合以前にも本紙で発表した「遺伝子レベルからの表現」でありそれに組み込まれている情報を嗅ぐことだ。しかし、従来の「遺伝子は不変」であるという定説がくつがえされた。ビックリした事に、胎児から成人へ成熟する課程で遺伝子DNAがバラバラになり再編成されるといふ。(ノーベル賞受賞者・利根川進、立花隆共著「精神と物質」参照)これはヤバイ、「オレの中にはウヤファーフジから受け継いできたアジアの風が吹いてるぜ」と発言したこともある。それが、バラバラになり、……なんて。

確かに、分子生物学という最先端科学は、闇に包まれた「生命」にそこまで光を当ててきた。しかし光の届かない世界があるはずで、バラバラになったなら「何が」それを再構成していくのか。そのメカニズムにはやはり「風」が吹いているはずだ。なぜなら重力の方向性があるように「種」の方向性があるはずだから。科学は「実証」により実感し、芸術は「表現」により実感する。私の中により強くアジアを実感したいために「表現」するのだ。民族主義というのじゃなく、うごめく生命感としての「まばゆいばかりの闇」をアジアと呼んでるにすぎないのだ。

闇の中にスーッと「アンカー」を降ろす。距離感がない。しかし……。

(きんじょうみつる 画家・美術教諭)

國場組グループ

國和會

会長 國場 幸昇



ひとにいつも新しく 生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21  
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270

復帰20年にして、音楽を中心とした表現シーンが華やかだ。その真っ只中にある照屋林賢氏に沖縄と音楽、表現への姿勢をインタビューしてみた。絵画との関わりとも併せて、自由に語ってもらった。GV=特別取材

## 美術のこと

**GV** 今日はお忙しいところ、インタビューに応じてくれてありがとうございます。地元的美術家が日本の、あるいは国際的なアートシーンに出て行く動きがあるんですけどもなかなか出られないですね。そこらへんのかねあいも含めて、林賢さんが今大成功をおさめているので、あやかりたいと（笑）。ミュージシャンも美術も同じ表現ですから、関連性もたくさんあると思うんです。いいお話をたくさんお聞きしたいと思いますので、よろしく願います。

**GV** 林賢さんは、絵についての関心はどうなんでしょう。

**照屋** 小学校の時は、ぺんてる主催の絵画コンクールは出すたびに何かの賞をもらって、賞状は十何枚かもらいました。たけど中学の時、物凄く絵の巧いのがいて、そいつに負けたなと思ってショックをうけてやめたんですよ。

**GV** これまで印象に残るような絵はありましたか。

**照屋** だんだん大人になってきて、知識で絵を判断してしまう可能性が凄く強くなっているんです。だからパッと見た瞬間を大切にしたいと思ってます。

**GV** 先程画廊で何点かご覧になってどうでしたか。

**照屋** 漠然といいなというのはあるけどね。あ、そうそうハッと引き込まれるといえば、アフリカンアーティストの作品がありましたね。あの作品には奥に何かがあるような気がした。

**GV** 音楽的な直感みたいなものがあるかもしれませんね。最近外国によく行っていらっしやいますが、そこで印象に残ったことはないですか。

**照屋** 僕らが美術と言っている事が物凄くうすっぺらに感じますね。芸術という

人が人を呼ぶのではなく、作品が人を呼ぶんだ。

照屋 林賢 GVアーティストインタビュー



のはもっと死と隣り合わせみたいにすぐ側にある。フランスやドイツなど建物にしてもあれだけの石を積んで、事故もあっただろうし死人も出たと思う。それでも建ったという凄さという想像を抱えるものがあるね。単なる美的感覚を追っているんじゃないで、凄さが感じられる。だから、そこで沖縄の文化の話は一切しなかったんですよ。恥ずかしいというより、分からないというか、とにかく圧倒されるんですね。

## 沖縄と音楽

**GV** 音楽の話聞かせて下さい。沖縄のコンテンポラリー作家と、いわゆるコンテンポラリー・ミュージシャンの、ジャンルは違うけど共通の問題点をもって

いるような気もするんですけど。

**照屋** 僕もそれは感じますね。これまでの沖縄の音楽をみると、ちょっと暗いですね。

**GV** それは歴史的にも暗い流れがあるということですか。

**照屋** そう、歴史でしょうね。歌は大人のものだという認識がずっとあるんですね。代表的な歌というとナクニーとかあってね。どんな時に唄ったかという恋の語らいの時とかね。子供が入りこめない世界の歌というのが多すぎて。そういう歌が歌としての価値観を認められていた。沖縄という島自体が、そうなんです。大人のキラいな歌を好んで歌う子供を大人は叱る。純粋に子供たちへの影響力みたいな部分は弱い。だから子供たちが、自分たちの歌であるという認識ができるサウンドを、という発想から結成されたのが、りんけんバンドなんです。

**GV** 今までサンシンだけでやってきた伝統を、言ってみれば日本画家が日本画の顔料を使って創作するんじゃないで西洋の油絵や版画を試したりして、あちらからの素材をどんどん取り入れながら、今日の自分の音楽の世界を構築しようとした感じですね。

**照屋** これまでのサウンドづくりで一番の問題は、やっぱりドラムとベースなんですね。1970年代位から音楽はギター、ドラム、キーボードを使って、伝えられるようになったでしょう。小編成でいるんな表現が可能になってきて、またそれが受け入れやすいという時代になったんで、僕らも洋楽器を取り入れたんです。そこで、民謡のリズムの中のベースとドラムの役割が問題になったわけです。洋楽器を取り入れたもうひとつの理由は、サンシンは800年前に沖縄に来てますが、600年かけて今の奏法が完成しました。カチャーシーもそうです。洋楽器が一般的になったのは戦後ですから、50年弱で洋楽器はここまで来た。歴史からすると、サンシンが大先輩。それでサンシンと同じ発想で洋楽器と接しなきゃいけないと思ったんです。だから西洋の楽器で沖縄の音楽は、表現できると信じているんですよ。沖縄のサンシンは中国から渡ってきたけど、カチャーシーの奏法を中国音楽に聞いた事がまだない。だから楽器によってではなくて、歌によって楽器が変わ



沖縄で生まれた郷土の信販会社——  
**沖縄信販**  
〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(098)861-1123 代  
アートライフは、OCクレジットで。

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 **CSCコンピューター学院**

那覇校 ☎900 沖縄県那覇市山下町18-26 電話(098)859-0746  
中部校 ☎904 沖縄県沖縄市宇室111-1-10 電話(098)938-1631

っていったんですね。絵の世界でも、そうだと思うけど。絵の具で変わるんじゃなくて表現の方法ですよ。風俗によって素材はどんどん変わっていく。産く時間はかかりますが勉強をつみかさねないといひ絵の具やいい楽器が泣きます。

**GV** やっぱリウチナーの楽器にこだわろうとしたんですか。

**照屋** ウチナーの楽器には全然こだわらない。サンシンも最初からウチナーの楽器じゃないと思ってるし。そのこだわりはないけど、ただ沖縄のリズムを出したいなどは思うんです。

## 音楽家とは

**GV** 今、ワールドミュージックブーム

ことはないと思う。CDだけが、向こうへ行って聴いてもらえればいい。

**GV** 沖縄のリズム、あなたの追求しているリズムが今、日本の社会に受け入れられている。新鮮な感動を与えている。それはどこら辺に起因しているのかな。

**照屋** 僕はただ一生懸命やっているからだと思う。なぜかという若い時、たまたま今帰仁の棒術を観たんですね。あんまり期待もしないで観てたんですが。だんだん引き込まれて涙が止まらなくなって。親父が側にいたんですが、恥ずかしくて。顔も見れなかつたんです。親父も泣いてました。あの時なぜそんなに感動したかという、何か命が吹き込まれているような。人間の本音の部分の何か湧き出る。ひとつのものに打ち込んでいる姿がドンドン迫ってくるんです。

以上のものはないんですね。僕はその時は気がつかなかったんだけど、だんだん僕も年をとって、りんけんバンドを作った分かったんだけど。その時、こう彼にアドバイスすればよかったなと思ったのは、沖縄に住みついて嫁さんをもらって、子供を作ってその子供あたりから本当に彼の考えている沖縄の音楽を掴むんじゃないかなと、だから本当に好きだったら自分の子や孫に託す位の入れこみがないと、生半可によそのものをやるものじゃないと思います。ヤマトのレコード会社とも仕事をしていますが、とにかく売れるものを創れと。じゃあ沖縄の音楽にいくなりレゲエをつけようと。いわゆるレゲエというのはリズムとしてはおもしろいし、今、若い人に受けてる。それをさせようとするんです。世界を見てみるとね



WOMAD91コンサート

で、数年前から注目されていますが。

**照屋** ブームというのは、本当はないんです。マスコミが騒いでいるだけなんです。つまりは自分自身の問題だと思っんですけど。だからブームというのは、あんまり信用してません。だけど一般の人には全然関係ないんですね。今、ブームといひますけどワールドミュージック系の売上げは落ち込んでいる。だから沖縄の音楽がブームというのは復帰20周年のあおりがあつて何となく沖縄を盛り上げようという雰囲気になってはいるんですけど。

**GV** 外国公演も今多いんでしょうね。

**照屋** 外国へ行くのは、本当は少なくしたい。それは、地球を汚染していくことだから。時差を乗り越えて無理して行く

あれをみて、人間はひとつの事に一生懸命やって、ただポーズだけじゃなくて本心でやれば誰かが見てくれるものが絶対あると思つたわけ。一生懸命やるという意味では他の何物にも変えられない素晴らしさがあるんだと。

**GV** 燃焼した生命感が聴く側に伝わってくるんですね。

**照屋** 僕はそう思っている。

**GV** 林賢さんの場合、一番自分が得意とするもので、土壌に根を生やしたものを徹底してやれば、何かにつないでいくものがあつたんですね。

**照屋** 以前僕のおじいさんの林山が元氣だったころ、古典を習っているアメリカ人を家へ迎えたんですね。聴いてみると、感心するほどうまいんですが、でもそれ

それぞれの国に自分たちのリズムがあるんだけど。それを日本のマスコミやレコード会社が流行っているから商売にするという次元では、これからはだめだと思います。商売人はそれでいいと思いますが。音楽家はそれに賛同してはいけなと思う。

**GV** それは、どこの国のミュージシャンでも言えるわけですね。

**照屋** 世界の音楽を聞けばすぐわかるんです。立場を逆にして考えれば、なぜぼくらが外国のCDを買って聴くかという自分ないものを求めるんですよ。そこから学ぶものが大きいから。確かに中にはつまらないものもある。例えば東南アジアなんかは英語で唄ったり、サウンドはアメリカ、もしくはジャパライズと



パームヒルズゴルフリゾート



ヒューマンテハロガー  
高尾コーポレーション

代表取締役社長 高倉 幸一

〒900 沖縄県那覇市技志1-2-1 Tel:098-861-7621

“専門画材の店”  
CULTURE PLAZA  
株式会社 みつや書店

〒902 沖縄県那覇市壹屋1-1-3 ☎(098)863-1650

いうのが多いんです。やっぱり国が進んでないから、これからですから。何かに煽を売っている。これが丸見えだから疲れるんですね。そういう音楽がいやで、さっきいったように、ステージでウチナーグチをどんどん使って、沖縄でやるのと同じようにやるんです。

**GV** 同感ですね。

**照屋** りんけんバンドが成功している理由がこの辺にあるんじゃないかと思うんですね。だから僕らみたいに、韓国や東南アジアのバンドでも東京でやったら絶対受けると思います。ついてくると思いますが、皆、日本の童謡を歌ったりする。東南アジアから来た歌手がいるんですが、そんな事をしてたら誰もあなたの事を好きにならないよと言いたいですね。やっぱり自分たちの音楽を前面に出すべきじゃないかな。

**GV** やはり、東南アジアからみれば日本は富める国なんですよ。そこへ何かを出すときは、どうしてもそんな風になるという事なんじゃないですか。

**照屋** 今までの経験で、強かにこの気持ちよく分かりますよ。だから目について仕方がない。Mさんがいるでしょう。彼は完全に中央集権に煽を売った人物だから、沖縄古来の歌を日本語に変えたり。沖縄でもあれがいいと思った人がいるでしょう。がっくりするんです。個人的に自分の欲に走った人間じゃないかと思えます。だから全然いいと思いません。現在もそういう道に少し走りかけている人も多い。残念な部分もありますね。

**GV** 地元でのりんけんバンドの評価はどうなんでしょう。

**照屋** まず、勘違いしないでくれと言いたいですね。沖縄というのを過大評価しないでくれと。それはマイナス点になると思うんですよ。以前にキリ短の先生が某新聞で、坂本龍一が沖縄の音楽を取り入れ、沖縄のミュージシャンもそれに刺激を受けて気が付いてやっているというニュアンスを込めた文章があった。それが大嫌いで、腹がたって会いに行こうかなと思った位。今思い出しても腹が立つんですが。沖縄の音楽が素晴らしくて、評価されているから俺たちはやるという気持ちはさらさらないんですよ。ただ、自分たちの音楽だから。好きだから。やっているというのが大前提にあるんですよ

ね。喜手刈林昌さんとか、登山盛仁さんなんかみんなそうですよね。僕らが何かをやる時に外部からの刺激でやっているというのは間違いなんです。自分の中から出てくるものがいいんだと。いつでもそういう気持ちでやっているんです。話は変わりますが、沖縄の文化やなんか、余りにも隣の芝生は青いという形でかたづけられてしまう。簡単にああそうですか、みたいに思う人がいるんで、それだけはやめたいですね。

## デジタルに分析

**GV** 大体輪郭が見えてきました。沖縄



歌リソン響、器楽隊の演奏

という土壌と、林賢のリズムというのはどういうふうに考えていますか。

**照屋** 以前は、純度の高い音楽をやりたいと思っていました。これは張く誤解される言い方なんです。いわゆる沖縄の島が出来て、誰かが手拍子をたたいてうなったのが唄になって。これが変化していろんな情報が入ってきた。自分たちの意志を伝えたり、そういった諸々で音楽はここまで来たんです。この一本の道というのは誰もが否定できません。多少形を変えながらも、僕の時代まで続いたという事は、ほっとしてる。次の時代はどうかという不安はありますが。でも、林山がいて林助がいて僕がいたという関係性は強かったと思いますね。林山とも音楽の話をよくしたけど、結局多少の食い違いはある。感覚的には全然違うんだけど。例えばキーボードの絶対音感みたいな部分の音の種類というのを知ってますが、でもサンシンには、絶対にこの音じゃないといけないというのはないんです。スライドすればいろんな音ができるか

ら、その辺の違いというものはつきりしてる。逆に、僕らにとってはすごく整理された音づかいになってきているわけです。それもいつかは解決しないといけない課題だと思っている。次は僕らの世代になるし、ある程度まではやっておきたいと思います。

**GV** それは、音をデジタルで捉えていくということですか。

**照屋** それも必要だけど、それは表現するものではないですよ。自分が表現したいものはどういうものかを自分で分析すること。自分の正体を知りたいということ。僕らの場合は洋楽器と共存したいというのがあるんです。サンシンの音は複雑な音が入っていて、ギターのピーンと一本線を引いた音じゃなくてもっと倍音をふくんでいる。だからいろんな楽器と一緒に演奏したときに、サンシンのチューニングが甘くてもすぐ合ってしまうんです。

**GV** 奥行が広いんですね。

**照屋** 抱きかかえるのが広い。チューニングメーターにきっちりあわせておかないと、録音した音を聞いた時に、手から響いてくるサンシンの音と違うんです。アタックが中心に音がポンとくるから最初のアタックの音が、低いか高いかでも音楽のニュアンスが違ってくる。低く弾くと暗くて、シャープ気味にしたら全体が明るくなるんです。

**GV** 琉球音楽家からも、いろいろ勉強されたんでしょうね。

**照屋** はい。僕もいろんなミュージシャンをしっているけど、ただ漠然としている部分というのが多かったんですね。僕らが知らない事が多すぎて。沖縄の歌でも教えてくださいといったら、弾いて、「トイヌグトウアビレーウ」という部分というのは、たくさんありますよね。本当に合理的に歌の中身を掘みたいという欲望がいつもあるんです。だから自分でも勉強しなくちゃいけない部分というのがあります。ただ漠然と聞いておもしろいというんだったら、それを仕事としてない人たち、つまり聞く側だとそれでいいんです。自分は音楽をやっているプロだからもっと、音楽としての物の見方、聞き方があるんじゃないかと思う。その辺努力しないといけない。漠然としたら、絶対にだめだと思います。だから自分が

ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店



南西空調設備株式会社

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(098)834-7831(代) FAX(098)834-5348

地元のビールが断然うまい。  
最も新鮮

オリオンビール

何をしているか、何を弾いたか、どんな事を今から目指すか、それはデジタル化してもいいんじゃないかと思ってます。  
GV 方法論を、もっと明快にしていこうということですね。

## 作品が人を呼ぶ

照屋 でもそういうことは、もちろん聞く人たちには関係ないですけど。例えば、鼓弓の音を聞いたらすぐ中国だと思う人がいるでしょう。そうじゃなくて楽器として、ひとつの音の響きとして聞いたらいいんです。例えば淡い色をよく使う有名な画家がいたら、あれはモネみたいだなと評価される。本人はこまると僕は思うんですよ。だから今レコード会社でも沖繩というのを抜きなさいと言うんですね。沖繩のりんけんバンドとかね。なんで沖繩なのと。最初東京でやったとき県人会には声をかけるなよと言いました。声をかけなくても来ますから。ニューヨークで、ひとつの民族がひとつのクラブに集まって、というのがあんだけど、僕は東京にそういうのを作りたくない。そうすると沖繩以外の人が入りこむ余地がない訳です。ヤマトウンチューは淋しくなると思うんですよ。コンサートでは方言をつかうんだけど、ウチナーナンチュなんだからウチナー口を使うという意味ではなくて、自分たちの姿をよりクリアに分かりやすく伝えたいという事です。それをずっとやってきました。東京の人や、沖繩の人が来て同じ態度で接します。沖繩の音楽を聞いた事のない東京の人達に聞かせてみたいと思ってます。沖繩では人が人を呼ぶみたいない感じがあって、そこは問題なんだと思う。本当は、作品が人を呼ぶんだ。つまり、表現というのはコミュニケーションを求めているんだから。いい歌をつくって、たくさんの人に感動をもたらす。それが、一番いいと思う。

GV 「シタイヒャー!」。まさに表現の原点を聞いた感じがするな。次に、これまでの活動で印象に残る話を聞かせてください。

照屋 7年前のヤマハのコンテストで、沖繩で3回グランプリを取ったんです。大阪大会に出て3回目だから、そろそろ

ヤマハからデビューできると、甘く考えていたんです。ヤマハにも押す人がいたんですが、プロデューサーが3回目だからそろそろ日本語にしたら、と言われたんです。断ったら、じゃあ1番だけでもいいからと言われて。僕は怒ってしまって、結局完全にアウトです。大阪に友達がいって、聴いたら「あかんがなりんけんバンドは売れない。あのサウンドじゃだめだ」と、好き勝手な事を言われた。本当に淋しい思いをしましたね。これまでやってきた苦勞に、さらに重たい荷物を持って、その帰りに女房が本土の某サマーランドで糸満ヤカラーズのショーをやっているんで見にいってました。少な



照屋 照屋

い観客がポツンポツンと、何かを食べながら、ただただ見ているんですね。これを見たらよけいに惨めになって。本当にその時は、もうつらかったですね。沖繩に帰って僕はもう一度最初に戻る。今立っている場所から、まわりの伯父さんとか、自分たちの兄弟が林賢の音楽が好きといってくれるだけでいいと。そのために音楽を創る。そこからやろうと決心したんです。

GV まさに、再出発ですね。

照屋 これがないければ、今のりんけんバンドはないですね。

## ウチナー口を全国へ

GV 話は変わりますが、林賢さんの詩が、教科書に掲載されるそうですね。

照屋 はい。2年前、本土上陸した時に僕らの演奏を聴いて、カルチャーショックを受けた人がたくさんいた。その中のひとり、全日空の機内誌「翼の王国」を編集している人がいたんです。コラム

の依頼だったんですが、ウチナーグチの詩を書きましようかと提案したんです。それが「日本の春」という特集に載りました。それを教育出版の人が見たというわけです。

GV あの詩は素晴らしいですね。ちょっと聞かせて下さい。

照屋 「春で一むん」という詩です。

風ぬそいそい いいあんべー  
花むちじゅらさ いいあんべー  
波ぬ音ん 風ぬきーん  
春で一むん 春で一むん

GV 伸びやかで、自然に対して、生に対して敬肅に受け止めて、控えめに抱え込むような自然に対する何かを僕は感じます。

照屋 中学の教科書に僕の詩が載るといのは、最高に嬉しいですね。中学生という難しい、わけのわからない年ごろのガキどもに、先生たちがウチナー口で、ウチナーだけじゃなくて、全国レベルで教えるというのはスカッとした何かがほとぼりしましたね。

GV それは爽快ですね。最後に、これからの抱負を聞かせてください。

照屋 5枚目でひとつのスタイルや、自分の持っていたものが出てくると思う。15枚までは絶対やりたい。自分の音楽をいつも分析する冷静さを持ちながらね。15枚目でりんけんバンドはひとつの仕事に成し遂げると感じます。

GV どうも、今日は長時間ありがとうございました。これからも、いい歌をいっぱいつくって、頑張ってください。

### ●てるや りんけん加力●

1949年沖繩市の三織店に生まれる。祖父が琉球古典の大家・林山、父が民謡エンタティナー・林助。様々な音楽活動の後、「りんけんバンド」を結成。新生沖繩ミュージックを次々に発表。全国で今、熱い注目を浴びている。

### ◎訂正とお詫び

先月号(No.13)記事「沖繩へ、そして沖繩から」の中で次の誤植がありました。訂正してお詫び申し上げます。

■到達と感覚→到達した感覚(1p&5f)

■終決七→終結し(1p&29f)

■三重構想→二重構造(3p&35f)

■近代美術→現代美術(4p&4f)



日本セメント沖繩地区総代理店

株式会社 金城キク商会

本社 那覇市西1丁目1番28号 電話(098)866-1101(代表)  
中支店 沖繩市松本5丁目12-1 電話(098)937-0404(代表)

\* 額縁の専門店 \*

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(098)867-4811 FAX(098)861-0367



画廊 沖縄  
GALLERY  
WORK-II

展示会のあんない

磯崎 新版画展

WORK-II / 4月13日~25日

金城 明一 水彩展

画廊 沖縄 / 4月6日~18日

gallery  
man & woman

「21世紀の女性」

最近観た映画で「IN BED WITH MADONNA」という現在最もアーティストパワーを発揮している「マドンナ」のドキュメンタリーがおもしろかった。その映画の中で彼女が舞台中心にあるベッドで自慰行為をしながら歌うシーンがあるが、地元警察からそのシーンをカットするようにとの要請があったにもかかわらず「私はアーティストでこれは私が自分を表現する為に選んだことだ!!」と、彼女は姿勢を変えることなく上演してみせた。その姿勢もさることながら、エロティックかつ前衛的に女性による自慰行為というヴェールで包まれた部分を剥ぎ取ってしまった彼女に、男性に決して媚びることなく、それでいて女性としての武器を最大限に利用している彼女に私は、21世紀の女性像を見たような気がした。

性の開放を謳いながらも性に縛られている女性が多い今日、マドンナのようなエネルギーで挑発的かつ母性愛に満ちあふれた女性というのは、同性の立場から見ても魅力的である。



この映画を観て、「スキャンダラスな女」「やらせ」などと考える人もいただろう。しかし私は彼女の姿勢から女性として人間として学ぶ事が多いと確信している。(きんじょうかずみ)

琉球犬

琉球犬—最近とみにクローズアップされている琉球在来の犬である。体はそれ程大きくないが、元来イノシシ狩りなどの狩犬である為に胸板は厚く、手足は太くてとても力強い。又、一番の特徴である体の縞模様から虎(トゥラ)とも呼ばれている。しかし、顔つきはどちらかというといハイエナに似ていてあまり格好いいとは言えない。

人に媚びることをせず、雄も雌も発情期であっても気に入らなければ、まったく相手をよせつけない。非常に氣

位の高い犬である。

実は私もその琉球犬を飼っている。登録は慣習で方言名でつけないといけなかったのでチルーと名付けた。もちろん雌犬であるが、困われた小屋の中を嫌い、雨が降っても、じっと外に立ちつくしている。独特の雰囲気を持ったこの犬に魅かれた理由が、こうした昔々の琉球人の荒骨さと気高さをもっているからである。それともう一つは、小さい頃、車にひかれて死にそうになった犬を助けきれなかった記憶がずっと残っているからだ。

コンクリートの路肩にころがり、威嚇するように低く唸りながら虚ろな目で、遠くを見つめていた野良犬のその目と、そのそばを無関心に、或いは嫌な顔をしながら早足に通り過ぎていく大人達の姿は、今でもはっきりと憶えている。荷立たい気持ちで何もできなかったあの時の償いと縄文時代からの琉球を見てきた犬とこれからの沖縄の時代を一緒に見続けていく為にも、私はこれからも琉球犬と共に琉球人として生きていきたい。

(あかみねしゅういち)

editor's voice

先の浦添市美術館の岡コレクション展(琉球漆器)はスバラシかった。思わず立ちすくみ、目をうばわれてしまった。日本画家の岡信孝氏の12年間に及ぶコレクションの寄贈と言う事であるが、あらためて、コレクションの意味を考えさせられた。一人のコレクターにウチナー人の魂がすくわれた思いだった。特に黒漆鳳凰漆絵螺細卓は、かつての琉球の美意識の高さが認められて国宝モノだ。

照屋林賢氏のインタビューは3時間近くかかった。彼は話が苦手と聞いていたが、それは誤りだ。ほとんど彼一人(?)がユンタクしていたと思う。イッペーユンタクジョージの知的な二枚目ウタサーといった感じ。自分の音楽に対する考え方は並々ならぬものがあり、「人が人を呼ぶのではなく、作品が人を呼ぶ」はキマリ!!だった。(上)

Adlib 広告制作事務所  
アドリヴ

〒901-21 浦添市宇勢理客527 ☎0988(77)6535



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎098(834-6760)